

美津、田中旭法両氏による「羽衣」が十五分放送され又琵琶に関する両氏の詳細を説明があった。

②四月十一日午後五時NHKラジオFM放送で都錦穂「本能寺」、押川旭葉「五条橋」の両女史が放送された。

永田吟流リサイタルに 四月五日(金)四時 琵琶。詩吟共演 半から東京千代田区のイイノホールで菊水流吟舞永田吟流振付リサイタルが開かれ春日、黒田武士など七題を公開、琵琶鈴木流泉氏の吟詠家六氏が応援出演した。(入場料千五百円)

京都琵琶協会 四月七日(日)午後一時会 四月定期茶話会 員矢吹旭美津女史宅で開催。目下流行の感冒等のため出席率極度に悪く二、三弾奏のあと来る十四日の協会春季演奏会の役割その他具体的打合せをして夕食後散会した。出席者田中、梅原、安住、矢吹、牧、古谷、平井、植村、来賓船尾。

伊藤金次郎氏 熱心を琵琶ファンで琵琶人を激励してその発展に大きく貢献された釧路市の同氏は三月十八日九十一才の生涯を終え惜逝された。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。(遺子釧路市北大通五ノ六伊藤敬之輔氏)

小田原国尊(二代吉水錦翁)氏 四月四日心筋梗塞のため八王寺滝山病院に於て逝去、享年八十五。薩摩琵琶の至宝で巨星墜つのが深い。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

(予 告)

- 京都琵琶協会五月定期茶話会 五月三日(休)午後一時協会の事務所(平井氏宅)。欠席者は当日午前中に必ず御連絡下さい。
○薩摩琵琶四明会創立二十五周年記念演奏会 五月五日(日)十一時、京都東山松原上ル安井金比羅宮会館。(市電清水坂下車)
○錦・都派琵琶披露会 五月九日(木)夕五時半東京上野本牧亭
○静岡琵琶協会設立十五周年記念演奏会 五月二十六日(日)正午静岡市駿府町婦人会館。出演者伴野正風、松永初心、若林鶴山、内藤秋水、加藤旭晃、原夏水、伴野鶴風、小川野水、岡尾鶴城、速見是水諸氏。
○日本琵琶振興会五月親睦研修会 五月二十六日(日)一時一八時、東京新宿洲鳳会館。

(訂 正) 京絃四月号各頁上部欄外三月一日とあるは四月一日の誤植。

三日見ぬまの桜かな、咲いたと思つたらいつの間にか散って世は青葉若葉薫る五月となった。三月以来待ってましたと計りに各地琵琶界は活躍を続けている。公開演奏会で一曲の時間を十分以内に制限するという提案に対しそれは短かすぎるとの反論者の意見を前号の本欄で披露したが之に就て賛否両論の寄書や電話がその後九人の方から京絃社に寄せられた。会の運営の立場から時間制限を是とするものと、中途半端の演奏では琵琶本来の良さを寫と味わり事が出来ないとする意見と。前者は琵琶人に多く後者は琵琶愛好の士に多い。詳しくは考うべし。又々鉄道や郵便のストで本号締切前に配達されなかつた御寄稿が或はあつたのではあるまいかと案じている。この場合はどうぞ悪からず御寛容下さい。ストも結構だが少しは一般人の迷惑も考えてほしい。

昭和四十九年五月一日発行(非売品) 編集者 植村 実 水 発行所 京 絃 社 高槻市津之江北町一ノ二二三 電話〇七二六(八五)六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二三九号 京 絃 社

袈裟と盛遠の 悲恋物語



旭城

紅葉の名所京都高尾山、神護寺中興の聖人とうたわれた文覚聖人(盛遠)もやはり人の子、若年の頃は青春の血に燃えて袈裟と渡(わたる)との愛欲の三角関係に悩み狂い、ついに渡の寝所に忍び込んで恋敵の首を斬り取ったが、意外にもそれは恋する袈裟の首だった。驚き泣き叫び翻然として悔悟し、世の無常を感じ剃髪出家して袈裟の菩提を弔い、仏道に精進して諸国を行脚し、荒廃した神護寺や大和東大寺の復興のため勸進した。

これが青史に残る血なまぐさい「源平争覇」時代に生きた北面の武士、人間遠藤盛遠の青春像である。

「源平盛衰記卷十九」文覚発心の事とあり文覚道心の心の起りを尋ねれば女ゆえなりけり。とあり、その事が詳記されている。文覚の素性を洗ってみると、盛遠は渡辺党の遠藤左近将監盛光の長男で、上西門院の北面の武士であった。三才の時父に死別して一門の滝口遠光に養われ、元服して盛遠と名乗

った。伯母が一人あって、昔都の衣川に住んでいたので一家は「衣川殿」といって、一人娘の袈裟は青黛の眉、丹華の口元愛々しく桃李の粧い芙蓉の眸いと気高く、而もこぼれる程の愛嬌があつて、揚貴妃が又観音さまの再来かと云われる程の絶世の美人であつた。

袈裟が十四の春を迎えると、みちのくの高貴富豪の家々から是非嫁に欲しいと申込みが殺到した。中でも嵯峨源氏の流れをくむ由緒の正しい渡辺党の源順の孫で北面の武士、源左衛門尉からは命をかけて、内からも外からも是非にと懇望され、縁談は成立して興入れした。夫婦の仲も睦まじく三年を経て、袈裟は十六、源左衛門は十七になつた。

その年の桜咲く春三月の半ば、摂津国渡辺橋の橋供養(落成式、渡り始め)が盛大に催された。その時、北面の武士渡辺党の遠藤盛遠は、この落成式の奉行を幕府から命じられ、紺濃の直垂に黒糸絨の腹巻に袖につけて折鳥帽子、銀の短巻二筋通して巻きたる長刀左の

脇に挟み、橋上に立って警固の兵達を下知している姿は天晴雄々しく頼もしい武達ぶりであつた。

やがて橋供養も滞りなく終つて見物の群衆もそれぞれ解散し、北の橋詰東棧敷からも多くの女房達が帰りはじめた中に、年の頃は十六、七の誠に豊艶な姿の女房が、輿に乗らんと簾を上げる風情が何とも優雅である。盛遠は先程からこの女房の姿に心消えて完全に魅せられ、夢遊病者のように輿のあとをつけたところ、華美な輿は程なく同じ北面の武士で、渡辺党の一門、渡(わたる)の邸に入った。

「アッ!!」この女は伯母の一人娘袈裟……わが妻にと早くから伯母に申し入れておいたのに、いつの間にか同党の渡の女房になつている。わが願いを袖にして渡に嫁入りさせた伯母の無情が恨めしい……と云つて、今更人の女房をどうすることも出来ず、さりとてあの美しい袈裟の姿が目には焼きついて忘れられず、寝ては夢起きては現(うつ)つ、煩惱のとりこになつて日夜思い悩んだ。

そして、遂に秋九月十三日の早朝伯母の家を訪ね、突然刀を抜き伯母を殺して自分も死ぬという、盛遠の只ならぬ気魄に伯母は驚いて訳を聞くと「三年前に是非わが女房にと申入れておいた切なる願望を聞き入れ給わずに、権門富貴の渡の許に袈裟を興入れさせた伯母が憎い、最早命も名誉も地位もいらぬ」と半狂乱の体である。伯母は恋に迷つた盛遠の言葉に困り果て、

「今夕袈裟を呼び寄せて何とか相談するから」となだめすかして一先づ帰らせ、その夜袈裟にその模様を具に話して、盛遠に殺されるよりは娘のお前の手にかゝって死にたいと、涙の物語に袈裟は、親の命にはかえられぬ、自分さえ死んだら盛遠もあきらめようし、母も死なずに済むと深く心にきめた。

日が暮れて首尾は如何にとやうて来た盛遠に「それほどまで思つて下さるならば夫を殺して下さい、それには明夜夫の酒を呑ませ、死出の門出に髪を洗って寝所に寝かせて置きますから、濡れた髪をたよりに殺して下さい。」と云えば、盛遠は承知して引上げてゆく。

たそがれ告げる鐘が聞こえる頃、渡は御殿の勤めを終えて帰って来た。不断に変わる酒肴の肴もてなしに渡は酔酩し、袈裟に手を引かれて帳台の奥に就寝、自分は髪を洗い夫の寝所に代つて横になつた。

夜はしんと更け渡る。深更盛遠は教えられた渡の寝所に忍び入って濡れた髪をたよりにその首を斬り取り、小袖に包んで持帰つた。これで恋敵の渡を殺し、多年宿願の袈裟と夫婦になることが出来ると喜びながら、小袖に包んだ首を極めてアツと驚いた。まぎれもなく意外にも血にまみれた袈裟の首である。盛遠は嘆き悲しみ、自分の無法な横恋慕の結果が斯くも非道なことになる、可愛い、袈裟は母や夫の身代りとなつてわが手で殺したこの上は自分も死んで渡どのに詫びようと、

袈裟の首を持って渡の邸に至り「自害しようと思つたが、どうか貴殿の手でわが首を斬り怨みを晴らして戴きたい」と刀を差出せば、今更あなたを首を斬つても袈裟は帰つて来ない、これも前生の宿業であらう、と寛大な言葉の後、愛欲我執の人間の浅ましさに無常を感じ、「わが女房は観世音が優婆夷の変身で我等を仏の道に導いたのであらう」と、渡は自らの小刀で髪を根元から切り落せば、盛遠は液を七度礼拝して自分も髪を切つた。これを聞いた袈裟の母も女の罪深いことを痛感し、尼となつて大阪四天王寺に参籠、翌年十月八日、年四十五にして大往生を遂げた。

その後左衛門尉渡は高僧の引導で剃髪し、三累淨戒を受けて「渡阿弥陀仏」といふ、又盛遠も武士を捨て、出家し「盛阿弥陀仏」となり、袈裟の骨を拾つて後園に墓を築き、三年の間一生懸命に行道念仏してその霊を弔つたが、一夜夢に墓の上に蓮花開いて袈裟が観世音の御姿でその上に座していた。盛遠は歡喜の涙を流し、盛阿弥陀仏と名を改め袈裟の姿を絵に書いて本尊と共に首に架け、全国に行脚して仏道に精進したといふ。

筆者はこの稿を起草して、何だか脚色された仏教説話集にあるような話ではあるが、これが歌舞伎の「渡辺橋供養」となり謡曲の「恋塚」となり、又琵琶にも歌われてゐる。「袈裟と盛遠」の恋塚が京都の南、白河法皇が寛治元年(一一〇八)に造営されたといふ「城南離宮」に鳥羽上皇も入居され鳥羽殿ともいふの近くに「上鳥羽の恋塚」と、それから「下鳥羽の恋塚」の二つがあるが、それが本ものかは判然しない。



我が道を行く

六十五年(一五)

西郷 天風

それは兎も角、日清日露など二大戦争の時代を初め幾多の変遷を重ねた明治と云う年号はこの四十五年が最終の年であり、亦私個人にとつても放縦生活に最後のピリオドを打つ年でもあった。

それは今更ら喋々するまでもなく、明治大帝の御崩御による歌舞音曲の停止や、年号も大正と改まって向う一年間は国民の総てが喪に服すなどの事態にたち至つたからである。そこで心機一転、面の勉強を志して見たもの、其時代は今日と違つて中々その手がかかりすら擱めず、只ふらふらと何の目あてもなき図書館へと足を運ぶのがだった。

図書館には受験勉強の学生が多かつたが、そのなかから小原と云う友人を得、やがて行動を共にすることゝなつて早稲田の下宿屋藝井館の彼の部屋に同宿することになつた。

この小原の父は小石川の砲兵工廠初代の提理(工廠長)として、かつてフランスの軍事工場見学と云う重任を了へ、帰朝後程なく病死してその遺産配分による豊かな学費を有つ小原は生来が淋しがり屋なのか、元気の無い日々を下宿の一室ですごしてゐたのだつた。それが二つ年上の同宿者を得て俄かに活気

づき、大学への希望が湧いて来たとその喜びを母親に通報する有様だつた。

時は大正二年の春、早稲田大学の商科や文科など、選科の入学希望者が定数に満たぬため入学は出来なかったが、その年の九月だつた、当時開校したばかりの、いはば工科の姉妹校とでも云う様な早稲田工手学校では、大学からの転校を歓迎して一年上の学年に編入するとのことに、二人そろつて転校したまではよかつたが、翌三年の初夏、小原がバラチブスと云う厄介な病気に取りつかれ、派出看護婦を備うやら、その指図で下宿の部屋を医医院の病室に運び備品を整えるやらで勘からず経費を費したが、快癒するまで母親の許えは知らせず押し通した。

それは、かつて帝大の俊才といわれた兄久直氏が卒業直前に病死し、女子大の才媛といわれた姉は鶴沼海岸の療養所に転地療養中というなかに、彼一人健在であることは母親にとつて如何に心強い存在であることか、その心中を洞察すれば彼久正が無事をよそおひの故なしとせずであつた。

かくて九月初め漸く快癒した時は二人共懐中無一物となり、病後の小使にも窮する有様となつてしまつた。勿論二人の下宿料は五ヶ月も溜る始末だつたが、雲井館のおかみは実に寛大且親切で只の一度も催促せず、顔色一つ変えぬばかりか時に茶菓の心配までして呉れる其温情には頭がさがるばかりだつた。そこで健康な私は、アルバイトをしてもこ

の負債の責任を果すべく、久しぶりで日本橋堀江町に絳友山田佐吉氏を訪問し、事情を語つて就職の相談をした。ところが山田氏はあつさり引受けて呉れたその口裡には、何か心当りがあるやの様に安心して下宿に戻れば翌朝早速電報が届き、山田氏の父君が待つてゐるとの電文に喜び勇んで面接した結果、以前から頼まれてゐるよい口があるとの事に、職種など考える余裕もなく一切を任せるしかなかつた。山田氏はこの父君との面接試験は上々吉で就職したがいなしと吾事の如く喜び、附近の食堂で祝盃をあげて呉れた、その友情には涙する程嬉しかつた。

翌日約束の時間に山田氏を訪ねれば、父君は一足先に先方に行き話を進めて待つとのことと、取りあはず指定先の新橋竹川町(今の銀座六丁目)の松屋呉服店に行けば、なんとそこが就職先だつた。

この松屋呉服店の大旦那と山田老との交りは、兄たり難く弟たり難しの間柄とて、私が初対面の挨拶を済ます間に就職は決定し、お互に有難う、ありがとうと、感謝の言葉を交わす有様は、何ともほゞ笑ましい風情だつた。

私には別に何の話もなくそのまゝ表での帳場に案内され、若旦那を初め四人の番頭やそのほか十人の中僧と小僧に紹介されてそのまゝお帳場に坐り、翌日も夕刻までお帳場番頭の見習い然と坐つたのであるが、どうにも気になるのは私の左手から少々後方にさがつた机に座を占め、記帳に余念のない風に見える

若旦那の、容易になじめそうもない面構えである。それも時折り私の様子を見ららしいが言葉はない、私も亦お世辞らしい言葉など出なかつた。

それは兎も角、このお帳場と称する机の右手には、分厚い五冊の大福帳が一冊づつ仕切られた縦長の箱に入れてあり、机より少々高めの格子が三面を囲む中に坐つておる私はどうにも落付かず、この店の前をゆき来る人通りをながめておると店の中を覗き見する人もあり、そんな時嘲笑の眼を感じ思わず顔をそむけるなどして我作ら厨甲斐さを感じるが、どうにもならぬ気がするのは、なまじ武士の生れが羞恥心を掻立てるのかも知れない。

京絃創刊

二十周年につきお願

琵琶月刊機関紙「京絃」は、琵琶文化の向上と琵琶楽の振興発展に資すべく昭和二十九年に第一号を発行して以来、一回の遅刊欠刊もなく六月号を以て創刊二十周年を迎えますが、之は偏に皆様の深い御理解のもと、絶大なご支援ご垂教のたまものと感謝感激致して居ります。ついでに同好の諸先生方からお祝の御寄書を頂戴し之を六月号に掲載して紙面を飾らせて頂きたいと存じますので御多忙中誠に恐れ入りますが多数御寄稿賜り度よろしくお願ひ申し上げます。

羅生門



志賀 一

源頼光と平井保昌が宿直の時、保昌が九条の羅生門に鬼が棲んでいて、暮れると人も通らないとの噂話をする...

六米)。瓦ぶきの両端には金色さんぜんたる鶏尾をあげた堂々たるものであったようである。しかし荒廃が早かっただけに名譽になるような話ばかり残っていない。

演奏会予告
五月五日(日)十一時開演
京都市東山線松原上ル
安井金比羅宮会館

盗賊になろうと羅生門に来た男が、夜中に白髪の老女が門の上で若い女の死体から髪の毛を引抜いている...

今昔物語を素材にした芥川竜之介の短編「羅生門」は彼の王朝物の第一作。戦後、芥川の小説をもとに黒沢明監督作映画「羅生門」は、日本映画を海外に広めた記念作。

決戦三方ヶ原
作詞 吾妻晃陽
譜付 小野鶴彦
すさぶ師走の空風に凍てつく天電物とせず渡る三方甲斐の軍...

松のあたりの屋下り」智謀豪胆それぞれに雌雄を決す敵味方」

一旦軍を休めしが」未だ明けやらぬ東雲に戦を転じて三河なる野田城指して去りけり

若手琵琶人の会

両雄対三方原 鷲翼魚鱗計自存
隊伍堂々期決戦 剣光場裡一天昏
眺み合いたる軍兵は ころかたてか石つぶて

(前略) 過日御案内申し上げましたとおり、去る二月二十三日、「若手琵琶人の会」第一回演奏会を開催いたしましたところ、雨天にもかかわらず、斯界の先輩諸先生の御支援により終始満員の状態となり、盛会裡に会を終ることができました。

故蔵本司水氏 追悼演奏会
優雅高尚の演奏ぶりで一世を風靡した錦心流の雄、神戸の蔵本司水氏が昨年八月、最愛の夫人と前後して逝去され万人からいたく惜しまれたが、故人を偲ぶ追悼演奏会が三月二十四日(日)午後一時から神戸市生田区公会堂で一水会神戸支部と司水会の共催、同大阪支部と蓮水会の後援で開催され、東京や京阪神の故人生前の絃友多数が協賛出演して盛況を呈した。

大蓋火を赤々と 焚けば夜空に城の影
しるくも浮び上りたり」追迫り来し信玄は
城の偉容に驚きつさりとして軍備も間に合わず
攻むるに利なし是迄とはやる将士をなだめつゝ

賜りますようお願い申し上げます。(後略)
若手琵琶人の会
藤巻旭彰記

舞台には祭壇を設けて遺影を安置し、生前の愛器や東京の日本芸能顕彰会(理事長鈴木鉦次郎氏)から生前に贈られた表彰楯やリボン付大メダル等が生花の間に飾られ、金屏風を背に献奏者が次ぎ次ぎと謹奏して故人の霊

を慰め、満員に近い一般聴衆から盛んに拍手が送られた。

五時半終演、各地からの電報披露、遺族代表蔵本清司氏の謝辞、神戸支部顧問松野紫雲氏の挨拶と閉会の辞のあと記念撮影、引続き別室で清宴が開かれ故人の思い出話などに花が咲いた。

(献奏者と曲目) 母常盤一溝脇光子。吉田吟葉。川上蓮糸。城山一田村吟魁。楊蓮清。青葉の笛一吉山蓮紅。山崎蓮桜。河の中島一竹内優水。反町紫水。詩吟一菊地庸子。夢一松岡玲水。藤田秀水。琵琶塚一小塩梁水。田中敷水。竜の口一中山鳳水。藤原英水。吉野山懐古一崎誓水。久内舟水。録音会津白虎隊一故蔵本司水。追悼詩吟一神戸支部員、富樫の涙一(京都琵琶協会代表)植村寛水、水天門一(四明会代表)平井春嶺、毒鏡頭一(絳水会長)広瀬敏水、由比ヶ浜風一(筑前旭会代表)柴田旭堂、坂崎出羽守一木村蓮水。小川吟水。東憲水。詩吟本能寺一(大阪支部顧問)桃木耳水、屋島回顧一三浦蓮水、松の廊下(下)一(一水会長・東京)小山田賞水

言 (24) 醒醐天皇の第四皇子 子との説もあるが不明。琵琶にすぐれた盲目の歌人。姉の逆髪宮が、盲目の故に捨てられた蟬丸を訪ねさまよひ、その琵琶の音を頼りにめぐり逢ったのが逢坂山。蟬丸神社は大津市逢坂一丁目にある。

五十五周年記念 浜本旭好女史演奏会



筑前琵琶研鎖五十五周年記念の表記演奏会が三月二十四日(日)十二時半から兵庫県相生市民会館で浜本女史主催、神戸旭昇会後援の元に華々しく開催された。幸い天候に恵まれ、永富、喜多両剣舞師範や地元の琴、尺八、舞踊家などの協賛出演もあり、又河本敏夫前大臣や、相生市長、市会議員の方々から贈られた花輪、生花で会場の雰囲気は頃になごやかさを加え、聴衆は開演前から続々と詰めかけて超満員の盛況裡に終始した。

(曲目と演奏者) 黒田武士一會員合奏、本能寺一神原・絃旭昇、赤垣源蔵一河原・絃旭昇、祇園小唄・青井山脈一尺八浜根。箏菊林、若き敦盛一丸尾旭宝、舞踊お里沢市一高田・安良田、大楠公一小林旭扇。絃旭昇、粟津の露一下条旭仙・絃旭昇。小絃旭好、五条橋一樋口旭総(八十八才)、秋風故郷の山一浜本旭好。絃旭昇。小絃旭璋。立方喜多、壇の浦一山本旭紅、舞踊梅川忠兵衛一阿賀。船曳、姫百合の塔一能勢旭陽、吉野山懐古一宮垣旭璋。絃旭昇。小絃旭好。立方永富、未練西行一橋本旭司。松岡旭文、春興一尺八石田。一箏菊林。二箏新田、合奏大物の浦一田中旭昇。浜本旭好。

琵琶を楽しむ会 二月二十四日(日)十時一二月集 会 六時楽寿荘。会の組織や運営などに就て協議の結果会員の輪番で当番幹事がその月の行事一切の企画運営に当る事を決定のあと会席料理で昼食を済ませ、道成寺一番匠渚水、川中島一高鳴啼水、琵琶塚一小塩梁水、西郷隆盛一太橋我水、舟弁慶一浅見汀水、河の中島一佐々木寒水、竜の口一木下皇水、山科の別れ一野尻撰水、朗詠一松原絹水、新曲本能寺一田中敷水、以上熱演の後解散した。

広瀬敏水一門 第一六〇回吟詠と琵琶の春の会 会が三月十七日(日)十一時から大阪天神筋の朝陽会館で開催され、一門の外京阪神を始め名古屋、静岡の名手多数協賛出演し盛会であった。羅生門一稲葉卓水、小敦盛(一)一近藤登水、井伊大老一中野淀水、雪晴れ一杭東詠水、小栗栖一森中志水、屋島の誉一中山嬢水、竜の口(上)一小西甫水、二〇三高地一樋口旭総。絃下条旭仙、白虎隊一名古屋丹野虎水、屋島回顧一神戸反町紫水、西郷隆盛一名古屋谷津水、城山一大阪尾山好水富樫の涙一京都植村寛水、新撰組一京都梅原旭濤、舟弁慶一静岡太田杯水、恋の内侍一会主広瀬敏水。尚プログラム中病気をとて二、三の欠演があり残念であった。

武絃会、一水会多摩 三月十七日(日)午後支部合同研修会 一時から小金井市福

社会館で開催、左記熱演して六時閉会した。尚四月は十四日同所にて開催の予定。菅公一工藤操秀、別れの盃一篠宮優水、伊豆の御難一中村修水、橋大隊長一伊藤警水、竜の口一中島瀑水、桜狩一石井效水、月下の陣一福島侯水、彰義隊一清水源城、七郷落一伊集院鼓城、足柄山一坂本錦道。

戸室清山氏 三月十七日(日)午後藤本、佐々木両氏の主催、琵琶を楽しむ会の後援で大阪川西市の藤本氏邸に於て清山流吟詠会長の同氏歓迎会が開催され、城山の月一小塩梁水、桜狩一佐々木寒水、雪月花一佐々木吟泉、吉野山懐古一浅見汀水、月下の陣一野尻撰水、大阪夏の陣一田中敷水、詩吟本能寺一桃木耳水、同九月十日一戸室清山各氏の外詩吟十四番(以上琵琶、詩吟共全部清山社中の尺八併奏)が披露されたあと主催者側の肝いりによる山海の珍味でビールを満を引、隠し芸などが続出して三十余名の出席者一同歓をたし九時半散会した。因に琵琶を楽しむ会の四月例会は二十一日伊丹市中央公民館で開催の予定。

旭萃会 三月二十一日(休)十一時大阪全国大会 難波高島屋七階ホールで山崎旭萃会主催のもと開催盛会であった。弁才天一永井。一坊寺。西村。旭美津。那須与市。一奥村。彰義隊一野田。鴨川の露一島田。島田良。旭瑛。西郷隆盛一太原。青葉の笛一梅

本。稲水。日高。旭泉、関ヶ原一旭壽。旭優。旭芳。旭照、衣川一島田旭干、大楠公一田中旭法、西郷隆盛一西森旭生、加藤清正一花輪旭興、粟津ヶ原一旭鳳。旭晴。旭典、別れの盃一本田旭媛、花の白虎隊一旭園。旭美津。旭照。旭蘭、隅田川一川喜多旭麗、井伊大老一旭勝。旭照。旭萃、淀君一旭舟。旭萃。旭邑、舟弁慶一旭美津。旭瑛。旭邑、小栗栖一押川旭葉、羅生門一太迫旭山、平野国臣一林田旭城、曲垣平九郎一小野旭枝、敵島の戦一友田旭泉、茨木一江本旭清。若き日の謙信一菊地旭蘭、北の庄一旭蘭。旭春。旭萃、戦艦大和一渡島旭鷲、源実朝公一板谷旭邑、大楠公一西村旭一声、リクエスト曲地震加藤。都落ち。大徳寺。安宅。禪師と正宗一山崎旭萃。尚当日は日本芸能顕彰会から山崎師にトロンボーン、丹生谷旭春。島田旭千。三木旭照三氏に表彰楯(理事長鈴木鉦次郎氏代理芸の友社長鈴木蒼士氏)の贈呈式が満場拍手裡にそれぞれ贈られた。

三位研修同志会 三月二十四日(日)三鷹市第十二回例会 上連雀公会堂に於て開催

門琵琶、伴風切り連弾一錦幽。錦道、古田耕水氏追悼の詩一山崎錦幽、橋大隊長一伊藤警水、元寇一清水源城、詩吟彰義隊一田戸桜丸、弁内侍一伊集院鼓城、足柄山一坂本錦道、桜狩一中村修水、松の廊下一山本隆水、似猿一西郷天風。以上演奏のあと座談会に移り散会した。

平井春嶺氏 三月二十八日夜九時六チャテレビ出演 シネル朝日放映「新十郎捕物帳快刀乱麻」で池部良が演じる勝海舟が西郷隆盛を懐かしむ場面に平井氏が白髪に木綿着物姿に扮し琵琶をかき、えて「城山」の一節を約三分間演奏しテレビ視聴者に感銘を与えた。

日本琵琶振興会 三月二十四日(日)一時一三月懇親研究会 八時東京新宿洲鳳会館。三時まで漢詩及び琵琶の余韻と問(ま)の關係(唐律詩の作法矛盾と漢体詩の性質)について詳述のあと出席者数氏が研究演奏をした。尚京絃四月号記載の同振興会二月例会に就て二月二十二日附朝日新聞夕刊で「七種の琵琶の講習会 邦楽琵琶、平家琵琶、薩摩盲僧琵琶、筑前四絃琵琶など七種の楽器に対する説明、現代薩摩琵琶の解説と実演が二十四日午後一時から洲鳳会館(東京都新宿区新宿一ノ四ノ九、地下鉄丸の内線新宿御苑前下車)で行われる。講師鈴木流泉(日本琵琶振興会長)五〇〇円(原文のまま)と報道され、又読売新聞その他にも大同小異の記事が載せられて当日の会場は来会者で溢れた。

浅野晴風 三月三十日(土)夕六時東京中野弥生例會 高円寺会館 (次号詳報) ラヂオで ①三月三十日午後六時四十五分ラヂオ放送 分から約一時間近畿放送ラヂオ「古典を語る」の座談会で京都橋会の矢吹旭